

これは昨日の話である

青井 一人

僕はいつものようにコンビニで買物をしていた。品物を手に取り、レジに向かう。

女性店員「2点で328円になります。」

品物を受け取り支払いを済ませる

女性店員「72円のお返しになります、ありがとうございます。」

約30秒ほどのやりとりが終わり店を出る。その間僕は嬉しさと悲しさが混ざったような少し懐かしい感覚に陥る。よくある話である、僕はこのコンビニの女性店員に好意を持っている。だがしかし常日頃、四六時中この女性店員の事で頭がいつぱいになるほどの好意ではなく、気になる存在、もしくはこの女性を見ると前述した懐かしい感覚がよみがえる事に興味があるのかも知れない。



これはまだ僕が学生服を着ていた頃の話だ。学年が一つ上がりクラスメートの顔ぶれも変わる、新しい席で担任を待っていた。幸運なのか不運なのか右隣には以前から気になっていた女の子が座っていて仲の良い女子生徒と談笑していた。僕は友達がいなかったわけではないが、その時は特にやることもなく机に

伏せて寝る姿勢をとっていた。やはり気になる娘は気になる、自然と耳に入ってくる声、何の話をしてい
るのだろうか？もしかしたら自分の事を話しているのかもしれない。などと都合のいい妄想をしつつぼや
けた二人の会話に耳を凝らした。耳から入り、脳みそを通り、心臓を揺さぶる。彼女たちは自身の初体験
の話をしていたのだ。今でこそこの程度で動揺することはないが、思春期まっさかりの純朴な少年にとつ
ては心臓にナイフを突き刺されそのまま窓から落とされるような精神的ダメージを受けた。そのやり場の
ない衝動はゴミ箱へ、はたまたトイレに流れていった。

◆ ◆

話はコンビニに戻る。僕が何故女性店員に対し懐かしい感覚に陥るのか、その答えは彼女は学生である
こと。僕が彼女に抱く好意は単純に容姿や雰囲気が入ったもので。悲しさについては彼女が「学生時
代」という今の自分には入り込むことのできない遠い世界にいること、さらに僕の「学生時代」での「あ
の思い出」によるものだろう。すでに彼女には好きな人や寄り添う相手がいて楽しい学生生活を送ってい
るのだらうなどと考えると今でも胸の傷が痛むが、あきらめの早い僕は「自分には関係のないこと」と冷
静を装い今日もコンビニに行くのである。

その日は友人と某所で待ち合わせをしていた。普段より早めに起き支度をして出発する。電車を乗り換え目的地を目指す。集合時間より少し前に到着し、駅前の落ち着ける場所で友人の到着を待っていた。渋谷、原宿などと比べれば可愛いものだが駅前にはたくさんの人々が行き交っていた。それぞれが目的地を目指して歩いて行く。不規則に時に信号に操られ流れていく様子をまるで天界から下界を見下ろす何様になつたような気分で眺めていた。

学生、サラリーマン、年寄り、子供、まさに社会の縮図だった。これだけ人がいればいつか自分と関わりを持つ人もいたりするのでは無いか？などと子供じみたことを考えたりと、人間観察に味をしめた僕はこれまた目を惹かれる女性を発見した。瞬時に思った「あの人とお近づきになりたい」と。もちろん無理とわかっていても脳内での言論、想像、空想、は自由であるため安易にそのようなことが言える。



分かりきつたことだが街ですれ違う他人など大概は二度と会うことなど無く、言わば一期一会である。では、この女性と今後関わりを持つためにはどうすればよいか考えた。選択肢は一つ「声をかける」これしかないのである。声を掛ければ何かしらの可能性が生まれる。もちろん煙たがられ、無視される可能性もある。むしろ高確率で敗北するだろう。しかし、そうでない可能性ももちろん有る、それを確かめるには「声をかける」しかない。その行動一つで何らかの可能性が広がり選択肢が増え新しい道が開けるかもしれない。

しかし僕にはそんな度胸は無く女性は街に消えていった。二度と会うことは無いだろう。この例に限らず、普段の生活の中でも、ここぞという時に何か行動を起こせば数分先、数年先、良くも悪くも何らかの結果が出て自分の未来に影響するということ。どうしようもないくらいに誰もが分かりきった、正論とも呼べない持論を展開したが、何もない日々より何か行動をしていくらか動きのある日々を過ごせたほうがマシだよなって思ったけどなんかお腹すいたしカレー食べたいの夕暮れ時、待ち合わせ時刻より2時間少々、友人は到着した。

僕は考えるのをやめた。